

WESTERN UNION EXPRESS

§ § ウェスタン・ユニオン・特急便 第38号 2017年10月14日(土) 発行 § §

ランドルフ・スコット--ハリー・ジョー・ブラウン--バッド・ベティカー--バート・ケネディー “Ranown Cycle”西部劇について

田口利人

今年9月に復刻シネマからランドルフ・スコットの西部劇が3本発売になった。これでランドルフ・スコットとバッド・ベティカー監督が組んだ作品は、『七人の無頼漢』(今月スターCh-2にて放映中)以外は、すべて字幕付きセルDVDが発売された訳だ。そこで、スコット&ベティカー作品について、特別なこだわりがあることについて話してみたい。

* * * * *

ランドルフ・スコットとバッド・ベティカー監督が組んだ映画には下記の7作品がある。

- 『七人の無頼漢』(1956)
- 『反撃の銃弾』(1957)
- 『デシジョン・アット・サンダウン』(1957 未公開)
- 『ブキャナン・ライズ・アローン』(1958 未公開)
- 『決闘ウエスト・バウンド』(1959)
- 『ライド・ロンサム』(1959 未公開)
- 『決闘コマンチ砦』(1960)

このうち、ジョン・ウェインのバトジャック・プロで製作された『七人の無頼漢』とワーナーで製作された『決闘ウエスト・バウンド』以外の5作品が、ランドルフ・スコットとハリー・ジョー・ブラウンが1955年に立ち上げたスコット-ブラウン・プロで製作された作品であると云うことを、まず区別しておく必要がある。

そして、スコット-ブラウン・プロで作られた5本の作品を通常“Ranown Cycle”と呼んでいるのだが、その中でも特別なコンセプトを感じさせるこだわりの作品が3作ある。それが『反撃の銃弾』、『ライド・ロンサム』、『決闘コマンチ砦』であり、残りの2作品とは明らかに一線を画したものであると考えることが出来る。これらの特徴は、主演ランドルフ・スコット、監督バッド・ベティカー、脚本バート・ケネディーの3人がタッグを組み、いずれも主要なロケーションがカリフォルニアのローン・パインにあるアラバマ・ヒルズで撮影されていることが重要だ。この4つの要素がそろった作品を狭義の“Ranown Cycle”作品として区別しなければならない。

このサイクルの基になったのが『七人の無頼漢』

(ポスターにある無頼漢のルビでは「ならずもの」と読ませている)であった。この映画が出来る切っ掛けは、当時33歳だったバート・ケネディーが初めて書いた脚本を、ジョン・ウェインがベティカー監督に見せたところ、是非やらせてくれと云うことになって映画化が実現した。最初主役は、ウェイン自身がやろうかとも考えたが、『捜索者』の撮影等で忙しく、ジョエル・マククリーやロバート・プレストンの名前も挙がったが、最終的にスコットの処へ廻って来た。ロケ地は近場のアラバマ・ヒルズが選ばれ、低予算映画に手慣れたベティカーらしい簡潔なこじんまりとした作品になったが、欧州でも評価されるなど予想外の好評を得ることとなった。



ビジネス投資に長けていたスコットは、このチャンスを見逃さなかった。彼はベティカーとケネディーをヘッド・ハンティングして、『七人の無頼漢』のような新しい西部劇を作ることで合意した。その第一弾が『反撃の銃弾』であった。そして、『ライド・ロンサム』、『決闘コマンチ砦』へとサイクルは巡るのだが、話の筋はいずれも過去に妻を殺されたり、拉致されたりした孤独なローン・ライダーが、復讐と正義のために戦うといった似たような設定でありながら、純化された物語の色合いは、それぞれに意味のある異なった色彩を放つ良く出来た作品であった。特にケネディーはこれをステップにして、監督への足掛かりをつかんだ。

* * * * *

脚本家とロケ場所が異なるので、狭義の範疇に入

られない2作品のうち、『デシジョン・アット・サンダウン』は、野外劇ではなく、町中と室内を舞台に、ドタバタした内容だ。『ブキャナン・ライズ・アローン』は、弾帯ベルトをたすきにかけ、メキシコへでも戦争に行くような姿で登場する主人公が、国境沿いの町でこたごたに巻き込まれると云うお話。両方とも3作品のコンセプトとは明らかに異なった部外作だ。

『決闘ウエスト・バウンド』は、スコット西部劇の評判がいいことに目を付けたワーナーが、まだ1本撮る契約が残っていると、無理やりスコットとベティカーを引っ張り出して、北軍の軍人が秘密作戦のために駅馬車の宿駅の経営を始めた話であるが、力がこもっていない。当然“Ranown Cycle”にも当てはまらない。



今年3月から米国で順次プレミアム公開されている“The Ballad of Lefty Brown”(一般公開は12月15日)が、10月28日から11月5日まで開催される第9回京都ヒストリカ国際映画祭で上映されることが決まった。邦題は『レフティ・ブラウンのバラード』。

この映画には、“A coming-of-age Western for a 65 year old man.”なんてキャッチ・コピーがついているので、WUの会員向けには最適の映画かもしれない。これまでは、インディーズのプロデューサーとしての実績が多かったジャレッド・モーシェの2作目となるプロデューサー兼監督作品。最初の監督作も2012年の“Dead Man’s Burden”という題の西部劇だった。ビル・ブルマン、ピーター・フォンダが主演し、西部開拓末期のモンタナを舞台に、牧場主と老カウボーイが巻き込まれた事件を描いている。



この映画祭では2014年12月にカナダ北部のゴールドラッシュを描いた『黄金』(2013、ドイツ製作『Gold』)を上映しているが、それ以外は一般公開もセルDVDもなしだった。『レフティ・ブラウンのバラード』もそうならなければいいと思うのが心配の種だ。

9月2日コロラドの「Telluride Film Festival」で初上映された『Hostiles』は、クリスチャン・ベイルがシャイアン族の家族を故郷へ送り届ける騎兵将校を演じる、かなりショッキングなシーンを含む敵性インディアンと白人との複雑な関係を描いた作品のようだ。監督は『クレイジー・ハート』、『ファーンズ/訣別の朝』、『ブラック・スキャンダル』を作った気鋭のスコット・クーバーだけに、是非とも日本公開して欲しいものだ。



復刻シネマライブラリー/西部劇発売リスト

()内の数字は、発売月

2011

『左ききの拳銃』(11)

2012

『シャイアン』(1)、『友情ある説得』(1)、
『ゴーストタウンの決闘』(2)、『西部無法伝』(8)、
『キャット・ダンシング』(9)、『独立騎兵隊』(12)

2015

『縛り首の木』(12)、『ダラス』(12)

2016

『バッファロー大隊』(1)、『法律なき町』(2)、
『馬上の二人』(3)、『ワイオミング』(3)、
『テキサスの五人の仲間』(8)、『反撃の銃弾』(10)、
『決闘コマンチ砦』(10)、『必殺の一弾』(10)、
『大西部への道』(10)、『レッド・ムーン』(10)、
『西部の人』(10)、『赤い連発銃』(11)、
『ビッグトレイル』(11)、『向う見ずの男』(11)、
『死の砦』(11)、『リオ・コンチョス』(11)、
『最後の銃撃』(11)、『決闘ウエスト・バウンド』(11)、
『地獄へ片足』(12)

2017

『駅馬車』(2) [HDリマスター Blu-ray]、
『荒野のガンマン』(2) [HDリマスター]、
『西部は俺にまかせろ』(3)、『草原の野獣』(3)、
『モンテ・ウォルシュ』(4)、『渡るべき多くの河』(4)、
『遠い喇叭』(5)、『クイック・ガン』(5)、
『手錠の男』(5)、『イエローストン砦』(5)、
『縄張り』(6)、『大いなる砲火』(7)、
『勇者の汚名』(7)、『ライド・ロンサム』(9)、
『デシジョン・アット・サンダウン』(9)、
『ブキャナン・ライズ・アローン』(9)、
『西部の旅がらす』(10)、『セブンセントの決闘』(10)、
『六番目の男』(16) [Blu-ray]

▶記事原稿募集いたします。編集発行:田口利人